

在日外国人支援の現場に おける参与実践

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

Center for the Study of Communication-Design

池田光穂

Mitzub'ixi Quq Chi'j

GCOE「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」
研究プロジェクト報告会 2009年4月18日

研究班（平成20年度）

- ・ 池田光穂（CSCD）
- ・ 中村安秀（人間科学研究科）
- ・ 林田雅至（CSCD）
- ・ 奥野克巳（桜美林大学）
- ・ 池上重弘（静岡芸術文化大学）
- ・ 村松紀子（兵庫県国際交流協会）
- ・ 檜本直樹（文学研究科博士課程）
- ・ Jeremiah Mock（UCSF）

成果と発表：01

- ・ 学会発表「教育を通じた人類学的デモクラシーの実践」日本文化人類学会第42回研究大会（京都市・2008年6月1日）
- ・ 学会発表「医療と文化の多元主義：日本事例の検討」第17回びわ湖国際医療フォーラム（大津市・2008年7月5日）
- ・ 国際セミナー「移動とアイデンティティ：コンフリクトと新たな地平」（サンパウロ・2008年8月5-7日）への参加と、日系ブラジル人社会調査

成果と発表：02

- ・ 学会発表「文化の翻訳に資格はいらない：制度的通訳と文化人類学」日本パブリックサービス通訳翻訳学会・第4回大会（大阪市・2008年10月5日）
- ・ 国際ワークショップ「在日外国人支援のためのCBPR（コミュニティに基づく参加型研究）手法の可能性」（吹田市・2008年11月15-16日）の実施
- ・ 学会発表「在日外国人支援のための社会調査技法について」第18回びわ湖国際医療フォーラム（大津市・2009年1月10日）

成果と発表：03

- CSCDオレンジカフェ（＝市民向けワークショップ）
「臨床コミュニケーションとしての医療通訳」
（豊中市・2009年1月28日）



2007年度の結論とその後の展開：01

- 【1】医療通訳の活動の調査より、とりわけこの活動における市民による「**参与実践家**」（participant practitioner）の重要性を強調した。
 - 2008年度前半、この種の社会活動はより活発になった。しかし9月以降の景気後退のなかで、参与実践家を支援する社会制度や市民の関心は、在日外国人を含む「**経済的弱者**」に重点が移動してきた。また彼／彼女らへの救済政策をめぐる、その想定される対象者のあいだに「**年齢的・社会階層的・人種的不均衡**」が起こっている（例：「ブラジル人よりもホームレス化した日本人の若者の元派遣労働者を救うべきである」という言説の登場）。

2007年度の結論とその後の展開：02

- 【2】医療通訳養成をもとめる社会的要請は高いが、需要と供給の総量、コスト計算、資格認定制度の未確立など、課題は山積。
 - 非営利ベースでは推計で年間約400名～500名程度の短期ないしは定期の講座受講者がいる（北海道50+関東150+中部100+関西150+α）
 - 2009年4月よりI_S社が英語の医療通訳者の本格的な養成を開始した（定員15名、1年コース、学費約35万円、入学目安TOEIC_730点以上）

2007年度の結論とその後の展開：03

- 【3】医療通訳養成の実践ベースの活動に加えて、大学が医療通訳活動を支援するための学際融合的な学術研究が不可欠であり、それが「**仲介的实践家**」（mediative practitioner）としての大学人（学生+教員）を陶冶する。
 - CBPRへの期待**（次のスライドへ）

CBPR

→コミュニティに基礎をおく参加型研究

(Community-Based Participatory Research, CBPR) に大学組織のあり方を変化させる可能性を求めて、その方法論について予備的な研究をおこない、次年度以降には「社会活動を支援する財団等の支援を模索しつつ」実際にCBPRを組み立てる必要性を研究班のメンバーが確認した。



本研究プロジェクトの結論：01

- 4つの結論のうち最初のもの：
- 前年度（2007）の成果発表で代表者が提唱した「参与実践者」としての〈医療通訳者〉の活動を、観想の対象として調査分析する研究するだけでなく、そのような研究をおこなっている研究者が参与実践者の活動を〈模倣〉——文化人類学の用語では〈参与観察〉——することの意味について考察した。

本研究プロジェクトの結論：02

- 参与実践者の活動を調査しつつ、同時にその活動を〈模倣〉するという行為をより定式化して扱えるようになれば、フィールド調査研究においてしばしば論争的になってきた、〈実践状況における客観化〉（objectification in practice）の保証や〈実践の具体化〉（embodiment of praxis）について理論的示唆を与えることができる。

本研究プロジェクトの結論：03

- 2008年度にワークショップ等を通して検討した「コミュニティに基礎をおく参加型研究」は、実践知（フロネーシス）同様「それ以外のやり方でも可能である」が、医療通訳が現場で抱える重層的な多言語・多文化間で生じるコミュニケーションの齟齬（コンフリクト発生の一要因）の解消に寄与する可能性をもつ。

本研究プロジェクトの結論：04

- 最後の結論です：
- 医療通訳者たちの〈良きふるまい〉が十全に実を結ぶためには、その活動の領域を〈コミュニティ〉へと展開し、便宜の供与者と被供与者のあいだの〈権力関係の布置〉を変える手法——例えばCBPR——が不可欠であり、現在の私たち（nosotro@s）はこのことについて十分に関与できる機会がある。

この発表は以上です。

以下は発表時間に余裕がある場合のCBPRの説明です。

下記のウェブページを参照してください

◎在日外国人支援のための社会調査技法について

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/090110biwako.html>

◎コミュニティに基礎をおく研究（CBPR）にみられる「権力委譲 power-demise」のプロセス

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/081010CBPR.htm>



研究と実践のジレンマ

- 具体的データがないと行動できない【例：当事者の主張とは関係なしに〈貧乏〉である客観的証拠がないと憲法25条に根拠をもつ「生活保護」は発動されない】。社会のなかで動く実践家は、実践を正当化するために実証データが不可欠。
- 他方で実践で多忙を極め、データを集めたり分析する時間も技量も再学習するチャンスもない。簡単なアンケートを発表すると専門家から十字砲火を浴びて沈没してしまう（自らの畏れにより冒険が阻害）。
- ここでの問題は、研究と実践は本当に両立しないのか？ということ。

CBPR

- CBPRとは「コミュニティにもとづく参加型研究＝**C**ommunity-**B**ased **P**articipatory **R**esearch」
- 北米では過去20年間のあいだに地歩を築きつつあるアプローチ（歴史的ルーツは半世紀以上前から.....）
- コミュニティ（＝共同体）に介入を前提とする社会調査技法で、コミュニティのメンバー（＝成員）の自己決定を最優先し、外部から参与する専門家の目的や意図をコミュニティとの合意をもとにするもの。

概念の整理

- **コミュニティ（＝共同体）とは何か？**（地域／成員の属性／アイデンティティ.....）
- **参加とは何か？**（意図・意識／活動・実践／アウトカムの我有・共有）
- **研究とは何か？**（真理探究／自己目的／有効性／応用展開）
- **これらの組み合わせで多様なCBPRの理念が形成されてきた。**

ルーツ

- ソル・タックス（Sol Tax, 1907-1995）：アクション人類学：問題解決を求める人々に研究者が参与し、研究者もその過程から学ぶ。
- ウィリアム・F・ホワイト（1917-1999）：組織論・都市社会学：人々が組織のなかで働く過程には再構成という創造的側面がみられる。
- パウロ・フレイレ（Paulo Freire, 1921-1997）：識字教育・成人教育学：抑圧された人たちが自らを解放するために内省的実践（praxis）をおこなうことができる。

※CBPRの3名の創始者の選定はJeremiah Mock（2008）によるもの。

CBPRのプロセス（1/2）

- 1. 居住地域内の保健問題の解決を研究者が着想する。この時点では具体的対策がない。
- 2. 研究者がコミュニティメンバーと接触しCBPRの委員会メンバーを組織する。
- 3. 委員会は地域内での解決すべき保健問題について列挙する。専門家は必要な情報は提供するが特定の問題解決を誘導することはしない。
- 4. 〈民主的討議〉を経て合意にもとづいて解決すべき保健問題を選定する。



CBPRのプロセス (2/2)

- 5. 委員会は保健問題を解消するための具体的な資料あつめを実践し、さらに具体的な到達目標や方法論を選定する。(資金調達) [Plan]
- 6. 人々を動員して実際に行動する。 [Do]
- 7. 委員会は行動の結果を検証する。 [Check]
- 8. 検証した結果の改善を試みる。 [Action]
- 9. 委員会は5. のプロセスに戻りPDCAのサイクルをまわし、当初想定した期間(あるいは半永久的に)これを繰り返し実践する。



CBPRに関する学習理論

- 問題にもとづく学習 (PBL, Problem-Based Learning)
- 最近接発達領域 (ZPD, Zone of Proximal Development)
- 実践共同体 (Community of Practice) ; 正統的周辺参加 (LPP, Legitimate Peripheral Participation)



CBPRに関する実践論

- マルクス主義運動から生まれた革命の担い手(=プロレタリアート)である草の根育成や工作
- W.E.デミング(1900-1993)が戦後日本の製造業界に持ち込んだTQC (Total Quality Control)
- 1980年代のプライマリヘルスケア理念にもとづくコミュニティ参加の保健活動
- 80年代後半のロバート・チェンバースらの参加型村落調査法 (Participatory Rural Appraisal)



CBPR [PDCA] は永久運動か？

- どのような社会運動にも究極目標=テロス (*telos*) というものがある。
- テロスと現実のギャップに直面した時には、ジレンマの回避として、教理 (*dogma*) を放棄することは稀で、(1) 現実主義的修正か、(2) 原理主義化、が二者択一で試みられることが多い。
- CBPRにも、現実直視型の修正主義派と理想優先の原理主義派の立場がみられる。

CBPRから医療通訳派が学ぶべきこと

- ・ 社会調査研究者との付き合い方
- ・ a. 自ら調査対象としてデータを提供して研究してもらう（＝被対象化戦略）。
- ・ b. 調査対象としての自己主張をおこない、データや研究成果を要求する（＝交渉戦略）。
- ・ c. **第三の道として共同歩調をとり、さらにサービスの受益者との協働によるCBPRを実施。**

この発表の学問的含意

- ・ 人文社会学の調査研究は久しく、（i）社会を客観的に外からながめる理論的ないしは価値中立的アプローチと、（ii）社会に積極的に介入支援する応用的ないしは実践的アプローチに二分され、それらに対立するものとして捉えられ、また両者はさまざまなレベルで論争を繰り広げてきた。
- ・ これらの対立を調停するために考えられた応用学サイドからの代替的提案が「**コミュニティにもとづく参加型研究＝CBPR**」である。
- ・ ただしCBPRの経験をより豊かにするために現場での経験知の蓄積が求められているが、その分析手法はまだ開発途上である。

このセクションの結論

- ・ 医療通訳が抱えるジレンマの解消として、〈専門家としての医療通訳〉から〈参与実践家としての医療通訳〉への役割の転換という解決法がある。CBPRはその経路のひとつである。
- ・ 医療通訳を研究する私たちが社会的実践の具体的諸問題に直面したときに〈専門家集団のなかの専門家〉としての従来の関わり方から、〈仲介的实践家としての専門家〉への役割の転換という方法がある。CBPRはその関わり方のひとつである。

専門家としての医療通訳

